

抑圧者のパターンに取り組む

マーシー・レンドン(Marcie Rendon)

私は先住民解放ワークショップや先住民のアライのワークショップで、様々な角度から「抑圧者の傷」に取り組む方法を教えてきました。たとえば、最近行ったワークショップでは先祖がアイルランドから移民してきた女性のデモをしました。そこで、「私たちはつらい経験をした。だから、所有する・取る・欲しがらる・自分のものにする・・・ことは当然の権利だ」という彼女の中のレコーディングに取り組みました。

彼女はアイルランドの「ジャガイモ飢饉(*1)」から話し始めました。続いて、「私たちはそこまでは貧窮していなかったけど、ここに来ればチャンスがあるって知っていた・・・」と言いました。つまり、ジャガイモ飢饉を根拠に、この地にやってきて、ミネソタでダコタの土地を取り上げたことを正当化しているのです。彼女はディスチャージはしていましたが、この関連性には気づいていなかったと思います。

週末のワークショップの間中、私はふたつの傷のレコーディングについてみていきました。「私はよい人間だ。よって、“取得する”権利がある」というのと、「私はつらい思いをした(それでも、立派にがんばった)。よって“所有する”あるいは“取る”権利がある」というのです。これらの見方はユダヤ・キリスト教の考え方に深くしみ込んでいると私は考えるのです。

私にとってこれはとてもエキサイティングなことでした。長い間、このような考え方についてディスチャージしたいと思っていましたが、どうすれば「傷のリハーサル(反復)」の域を超越できるのかと思案していたのです。「傷のリハーサル」は今まで口に出して言ったことのないことを言うという面ではコントラディクションですが、それ以上はあまり効果がありませんでした。たとえば、私は車を運転している最中に、いつも他のドライバーを批判したり、罵倒したりするのです。そこで、これらの(私の)気持ちに気づきながらもそれを正当化せず、かつ、この行為を自分が心地よく感じていることに気づくことのできるセッションができれば有益だと思いました。私の行為とはスピードを出したがついてくる後続車に対して相手のドライバーを屈辱するようなことばを思い浮かべながらわざとゆっくり運転するなど、要するに私の受け身の抵抗です。自分のこれらの気持ちに気づき、自分で「フムー」と言って、その気持ちを信じないよう自分に気づかせることができればよいのでは、とブライアンが提案しました。

*1: ◆1845～1849年にジャガイモの疫病の発生により、ジャガイモを主食にしていたアイルランドの農民や下層階級に多くの死者が出たもの。アイルランドの人口の20～25%が失われたとされ、海外への移住者が急増し、また援助を行わなかったイングランドに対する不信感から独立運動が

促進されるなど、その後のアイルランドに大きな影響を与えた。(出典:英辞郎 on the Web)

アリソン・エハラ＝ブラウン (Alison Ehara-Brown)

第一回「白人として育った先住民のワークショップ」の二日目の朝、マーシーは抑圧者のパターンのディスチャージについて話しました。私はこれほど抑圧者のパターンのディスチャージをエキサイティングに思ったことはありませんでした。マーシーは「自分を悪い人間だと思わせる」いろいろな道徳的価値判断を(私たちから)排除させた上で、抑圧者のパターンとは、抑圧的社会に住む人なら(当然ながら)誰にも起きる日常の一環にしかすぎないと説明しました。そして、抑圧者のパターンについてのすばらしいカウンセラーになることを学ぶのは、破壊や欲や抑圧などのパターンから地球を取り戻すための重要なチャレンジであることに気づかせさせてくれました。

マーシーは先住民のコミュニティ、とくに居留地にあるコミュニティでは、先住民は抑圧を内面化すると(抑圧者と被害者の両方の傷を抱え込む)、他の先住民しかその「抑圧者の傷」を回す対象がないことがしばしばだ、と言いました。また、自分に強いられた抑圧者のパターンを他の人(しばしば自分より年下の相手)に強いると決めて行動に出た幼いころに戻ってディスチャージするよう言いました。マーシーは幼いころ、自分のやっていることが「抑圧的」であることをちゃんと自覚していて、相手がどれだけ傷つくかをちゃんと知っていたという自らのストーリーを語りました。彼女がカウンセリングしたある女性は人を抑圧した記憶はひとつもないと言ったそうです。人を叩いたこともないし、傷つけるようなことを言ったこともないそうです。もっと幼いころに記憶をたどっていくと、突然、ある“目つき”で大人に見られた記憶に遭遇しました。すると、彼女は同じ目つきで妹を見てやったそうです。その目つきから妹には「おまえはくずで、無価値だ」という思いが伝わり、妹は黙り込むのです。この女性は、日々、事態の主導権を握って、人の上手に出たいときにはこの目つきをする自分に気づきました。

デモでは、人は抑圧者のパターンを強いられなければ、その人は抑圧者のパターンを身に付けることはなかったこと、また、私たちは本来、無垢であったことをマーシーが明確に示してくれたことがとてもよかったです。同時に、自分が意識的に抑圧者の地位を甘受した瞬間を自覚し、正視し、(その決断に)責任を持たなくてはいけないことも執拗に示してくれました。まず、最初に抑圧したのは誰かをクライアントに明確にさせます。次に「でも、あなたがそれをした日にはおばあちゃんは家にいなかったでしょ。あなたがそれをしたんだよ…」と言います。このように、マーシーは「抑圧者」として行動することを決めたその箇所にクライアントを留めて取り組むように教えました。私たちはこうした悲しく、難しく、価値ある取り組みができることに安堵しました。本人に責任を持たせると同時に、その人を責めないというふたつのバランスの採り方をマーシーは教えてくれました。エキサイティングで解放感のある取り組みです。すばらしいサポートグループができました。

歴史を通して、「抑圧」に直面した人々はさまざまなことを試しました。南北アメリカ大陸にヨーロッパ人がやってきて以来、先住民は歓迎したり、分け合ったり、教えたり、逃げ隠れしたり、殺したり、土地を守ったり、条約交渉をしたり、さまざまな手段を講じてきました。しかし、事態の方向転換を可能にする重要な手段として、抑圧者のパターンについてさまざまなグループの人々を実際にカウンセリングできるようになることがあります。さもなければ、「抑圧」がいつまでも行動となって体现されるのです。

Working on oppressor patterns

Heritage 4 号 121-122 ページより

Marcie Rendon, Alison Ehara-Brown

翻訳 白石 理恵

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。（翻訳文 2010 年。原文 2010 年）。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。